校長室だより～燦燦～ №５４０

跋文その３

2022.4.19

おそらく、教職員であるというだけで、教職員であり続けることが困難な時代です。もっとも教職員であるというだけで、教職員であり続けることが容認された時代などかつてありませんでしたし、将来もないでしょう。そうであるがゆえに、教職員であり続けようと私たち自身を支え続けることができます。あの日から遠く離れて、私たちは、よしや「渺たる滄海の一粟」であるとしても、あの日の子どもたちとそのかたわらに立った者たちを、そして今、眼前のこの子どもたちを決して裏切らないようにしようではありませんか。

＊ 渺たる滄海の一粟（びょうたるそうかいのいちぞく）

はてしなく広い青海原の中の一粒の粟のような存在

この跋文が載っているハンドブックは改訂がされ、現在のもので第３版となる。法令をもとに作成しているため、古いものは役に立たずとっておいても仕方がない。だが、私はとってある。こんな調子だから書斎が本やファイルだらけになってしまう。ただし、このハンドブックは跋文が載っているため特別に保管してあったものである。

先日、以前からお世話になっている方からお電話をいただいた。用件は、あの跋文が載っているハンドブックはないかということだった。お話を聞いてすぐに跋文のことだとわかった。載っているのは初代のハンドブックだということもわかった。

だが、野田中学校の校長室にはなかった。事務室にもなかった。家の書斎にはあることはわかっていた。帰宅すると、すぐに跋文のページの画像を送った。何にお使いになるかはわからなかったが、返信には「しっかり読み込みます」とあった。そうなのである。あっさり読む文章ではない。じっくりとかみしめながら考えながら読む文章なのである。くり返し読みたくなる文章である。ついでに家人に読ませたら、泣いていた。何だかうれしかった。跋文の結びには、以下のようにある。

最後に、全ての、かつて子どもから成長した者たち、また、将来大人へと成長するべき者たちとともに、成長するということにかかわり続ける教職員として想い起こしたいのです。ドストエフスキー『未成年』の、その希望の末文を。

「時代はつねに未成年によって創造されるものなのですから」（筑波書房刊　小沼文彦訳）

その後、「跋文」という言葉には会っていない。私がそのレベルで生きていないせいもあるが、やはり跋文の筆者は特別な存在である。